

## 当帰芍薬散(金匱要略)

**組 成** 当帰3.0 芍薬4.0～6.0 川芎3.0 朮4.0 茯苓4.0 沢瀉4.0～5.0

**主 治** 肝気乗脾(肝血虚・脾虚湿滯)

**効 能** 補血調肝・運脾除湿

### プロフィール

本方は『金匱要略』妊娠門を出典とし、条文では、妊婦及び婦人の腹痛に対して使用することになっている。しかし、日本では江戸時代より、妊娠時のみならず、広く産婦人科疾患に用いられる。現在では痴呆症、貧血、腎疾患、皮膚疾患を始め、疼痛性疾患など、老若男女を問わず幅広く様々な症状に使われる。原典では、各生薬を末にし、酒で服用するように指示があるが、現在では煎剤の形で服用することが多い。

### 方 解

本方は、補血調肝の薬物と運脾除湿の薬物を組み合わせたものであり、別の見方をすれば、四物湯去地黄と五苓散去桂枝・猪苓の合方とも考えられる。四物湯成分(当帰、芍薬、川芎)は補血柔肝、活血の作用があり、調肝に働く。このうち川芎はさらに疏肝理気にも働く。五苓散成分(茯苓、朮、沢瀉)は健脾利湿の作用があり、健脾して湿を除く。即ち、肝血が不足して肝気をコントロールできず、脾虚湿滯に乗じて肝気が脾に横逆した肝脾不和を調整する。一種の和解薬である。

### 四診上の特徴

望診上、色白柳腰の、一見華奢な婦人に見えるというのが通説で、湯本求真はこういう婦人が歩いてくるのを見て、「向こうから当帰芍薬散が歩いてくる」と言ったという逸話がある。花輪は、「色白、皮膚の肌理が細かく、水っぽい感じ、筋肉のトーンスが柔らかく浮腫傾向。冷え性で朝夕に下肢の浮腫傾向あり。肩こり、易疲労感を訴える」と述べている<sup>1)</sup>。このほかに、頭冒感、目眩感を訴えるものがある。なお、本方は利尿作用が期待されるが、中田らは、本方有効群で尿不利を認めたものは97例

中19名(24%)であり、そのうちの11例は夜間尿であったという<sup>2)</sup>。

舌診上、舌色は淡紅色から紫色で、湿っており、時に歯痕を認める。苔は認めないか薄い白苔であることが多い。脈は沈で弱。

腹証はさまざまで一定していない。やや浮腫状の皮膚をしており、腹力は中程度、小腹は瘀血を示す場合と膨隆して無力な場合がある。一般的に本方証は胃内停水の存在を認めることが多いが、花輪は、「ポチャポチャと心窩部で振水音が聞こえるものはかえって食欲がなくなることがある」と述べ、注意を喚起している<sup>1)</sup>。『腹証奇覧』には、「臍傍に圧痛点があり、腰や背中に痛みが放散する」とある。

中田らは、当帰芍薬散を投与して有効であった若い女性を中心とした97例について検討し、下記のような臨床像を得たと報告している<sup>2)</sup>。

1. 年齢では20歳代から30歳代の性成熟期の女性
2. 体格的には中肉から瘦身の女性
3. 皮膚は血色がなく、緊張度が低下している
4. 冷え症を伴う
5. 月経の不調を伴う(月経痛、月経不順、月経過多、月経過少、無月経等)
6. 腹状は臍傍の圧痛(特に左側)を認め、腹力もあまり強くない
7. 流産癖
8. 妊娠時、証に関係なく安産安胎を目的に

### 使用上の注意

胃腸虚弱者の場合に食欲不振や下痢が見られることがある。食欲不振の場合は、食後服用とするか当帰と川芎を減量する。下痢の場合は茯苓・白朮を増量するか、人參湯を加える。



## 臨床応用

### ■ 婦人科疾患

当帰芍薬散は婦人科の聖薬として非常に多くの状況で用いられている。冷え症、生理不順・生理痛、不妊症、妊娠中の諸症状、更年期障害と、特に虚証の婦人の青壮年期に特有のトラブルで多く使用される。冷えが強い場合には附子を加える。

本方は、妊娠中の安胎薬(流産防止)として広く知られ繁用されている。中田らは「妊婦に投与した例では100%安産の効果を得た」と述べている<sup>2)</sup>。また、「子供が出来ないで本院を訪れた患者で、妊娠はするがすぐ流産してしまう、という所謂流産癖に対しては本処方是非常に効果がよく、五例中四例に無事子供が出来ていた」と報告している<sup>2)</sup>。妊娠中の腹痛や貧血に対しても使われる。さらに子宮収縮抑制効果により切迫早産の治療にも効果が期待され<sup>3)</sup>、妊娠中毒症に対してもしばしば使用される<sup>4)</sup>。その他、帯下、膣炎、外陰部痒痒症などにも使われ<sup>5)</sup>、応用範囲は広く老年期までとなる。

### ■ 痴呆症

最近の研究により、当帰芍薬散がアルツハイマー型痴呆に有効であることが明らかになっている。山本孝之の研究では、知的機能と長期記憶、書字能力、それに会話や衣類の着脱などで改善が認められたという<sup>6)</sup>。基礎的研究では、アセチルコリンの脳内代謝の改善が見られることが判明し、これが痴呆改善に寄与しているとみられている。また、脳血管障害の後遺症にも、日常生活動作の向上が期待できるという報告もある<sup>7)</sup>。

### ■ 腎・泌尿器疾患

慢性腎炎に単独で、あるいは小柴胡湯に合してしばしば使用される。当帰芍薬散に血小板凝集抑制作用があること<sup>8)</sup>と関係があると思われる。中田らは、「少数ではあるが、慢性腎炎患者のなかで当帰芍薬散の証を認めた例では、本処方の投与により、血尿、蛋白尿等の改善を認めた。これらの有効患者は糸球体腎炎4例、妊娠後に発症したもの1例、腎盂腎炎1例であった(後略)」と述べている<sup>2)</sup>。藤平はネフローゼに対して使用し、著効を得た症例を報告している<sup>9)</sup>。慢性腎不全においても、その進行を抑

制する効果が認められる場合がある<sup>10)</sup>。この他、慢性膀胱炎にも用いることがある。

### ■ 血液疾患

鉄欠乏性貧血に対して有効であったという報告がある。赤瀬は、鉄剤との比較で4週、8週において有意に改善し、さらに医療経済的にも勝れていたと述べている<sup>11)</sup>。一方、婦人科の項で記したように、妊娠に伴う貧血にも効果がある。

### ■ 皮膚疾患

尋常性瘡癤、肝斑、主婦湿疹等の手湿疹などに使用される。『漢方診療医典』は、尋常性瘡癤で「貧血性で冷え性の婦人などには本方がよい。薏苡仁6.0gを加え、煎じて服用させた方がよい」と述べており、藤平も当帰芍薬散加薏苡仁の経験に記載している<sup>9)</sup>。

### ■ 眼科疾患

白内障や緑内障を始め、ぶどう膜炎、中心性網膜炎等に随証的に使用される。この他、反復性の麦粒腫やアレルギー性結膜炎の体質改善、眼性疲労や眼外傷、パセドウ病の眼球突出などの報告がある。

### ■ 疼痛性疾患

本方は、頭痛、頸肩腕痛、肩こり、腰痛、関節リウマチ、坐骨神経痛等にもしばしば使用される。関は、この場合、水毒と瘀血を目標に陰証、虚証の患者で頻用されると述べている<sup>12)</sup>。

### ■ 自己免疫疾患

膠原病などの免疫疾患においては、免疫複合体の除去を期待して当帰芍薬散を使用することがある。飯島らは、マウスで用量依存的に抗体除去することを報告している<sup>13)</sup>。臨床でも、ベーチェット病<sup>14)</sup>や関節リウマチ、SLE、シェーグレン症候群<sup>1)</sup>や、分類不能の膠原病<sup>15)</sup>にも使用される。

### ■ その他

アレルギー性鼻炎で、他剤に反応がない場合に使用して軽快した報告が見られるほか、山本巖は、季節性アレルギー性鼻炎の発作時以外の治療として、小青竜湯と本方を合して長期に投与することを推奨している。気管支喘息も時に本方で軽快することがあり、花輪はその著書の中で、月経時に悪化する喘息に対する使用方法を述べている<sup>1)</sup>。他には、めまいや痔疾などの報告がある。

## <参考文献>

- 花輪壽彦：漢方診療のレッスン 金原出版 東京 1995.
- 中田敬吾ほか：当帰芍薬散の臨床 日東医誌 78(3)：101-107, 1978.
- 千村哲朗ほか：切迫流産に対する当帰芍薬散の投与効果 産婦人科の世界 41(8)：722-731, 1989.
- 野口和男：過去10年間当院における妊娠中毒症に対する検討 特に漢方(当芍散)投与及び母親学級に対する効果 Jap J Prim care 8：131-133, 1985.
- 福島峰子：不正出血・帯下・膣炎・外陰痒痒症 漢方医学講座 59：38-45, 1991.
- 山本孝之：アルツハイマー型痴呆と漢方療法 漢方と最新治療 1(2)：133-140, 1992.
- 福島武雄ほか：脳血管障害に伴う神経症状と当帰芍薬散 漢方と最新治療 6(4)：327-331, 1997.
- 飯岡秀晃ほか：ツムラ当帰芍薬散の血小板凝集阻止活性の研究 産婦人科漢方研究のあゆみ 41-45, 1991.
- 藤平健：漢方臨床ノート治験編 創元社 大阪 1996.
- 新井信ほか：腎疾患の2例 漢方の臨床 44：704-712, 1997.
- 赤瀬朋秀：鉄欠乏性貧血に対する当帰芍薬散の応用 漢方と最新治療 8(2)：143-148, 1999.
- 関直樹：運動器の痛みに対する漢方治療 現代東洋医学 14(2)：173-177, 1993.
- 飯島宏治：免疫複合体除去能に対する当帰芍薬散の作用 和漢医薬学雑誌 7：284-285, 1990.
- 西戸孝昭：ベーチェット病の漢方治療 現代東洋医学 難病・難症の漢方治療第3集 11(1)：236-237, 1990.
- 浅岡俊之：分類不能型膠原病における漢方療法の意義 漢方と最新治療 7(4)：359-361, 1999.